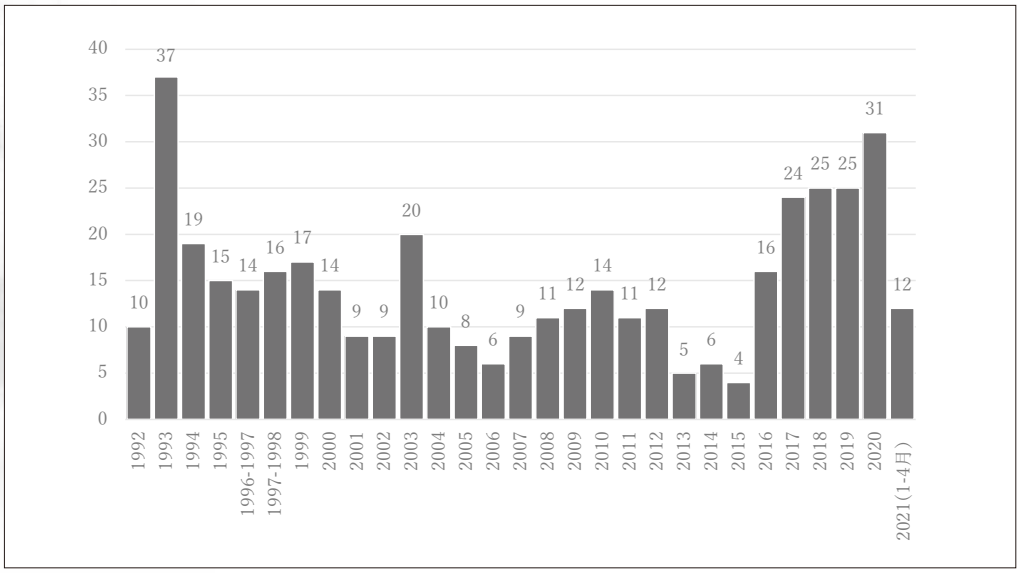
Commentary

ACRT の PubMedCentral 収載に向けた試みについて

W'Waves 編集長　**柴田 昌彦**

Editor in Chief, Annals of Cancer Research and Therapy
日本癌病態治療研究会 副理事長

Annals of Cancer Research and Therapy（ACRT）誌は本研究会の英文機関誌として1992年に創刊されました。本邦で発刊される英文雑誌では 2 番目に長い歴史を持つと聞いています。オンラインジャーナルとしてほぼ毎年 2 回の発刊を行ってきており、本年は Vol. 29を数え、これまで400以上の英語論文を公開してきました。創刊よりしばらくは生越喬二名誉会長が当時 Editor in Chief として ACRT を切り盛りされ、若い医師たちからの投稿に対して十分な教育的配慮も重要と考え、これまで編集側での Brash Up なども多く行ってきました。さらに欧文誌としては大変ありがたい無料での投稿にもこだわって運営されてきました。近年、学位や専門医などの取得システムの確立には英文の学術論文数がそのポイントとして重視されるようになりました。しかしながら本誌はその長い歴史にもかかわらずこれらの目的にはカウントされないという状況がこれまで続いてきました。このために本誌は投稿論文数が増えることなく質の向上もままならない状況が続いてきており、これまでの Editor をはじめ多くの先生方の多大なご苦労に報いることができておりません。この負のスパイラルともいうべき状況を打破するためには本誌を国際的な学術論文の Platform に乗せることが必要と考えられました。竹之下誠一先生（前理事長）と坂本純一先生（前 Editor in Chief）の強力な働きかけにより、研究会の最優先事項として Pub Med Central（PMC）への掲載に挑戦することが決定しました。当時（2016–2017年）、Springer 社などの調査の結果、最低年間24編の論文掲載が必要と判明し、まずは論文数を確保することに全力を傾けることとなりました。このために坂本先生のご尽力に



ACRT 年間論文掲載数

より投稿、査読のプロジェクトチームを開設し、ウズベキスタンなど海外からの論文を投稿いただきました。さらに運営資金を確保すべく両先生にはこの趣旨に賛同する企業、病院、NPO などを直接訪問し寄付を集めていただきました。その結果2015年まで数年は年間数編の投稿でしたが2016年には16編、2017年から2020年の 4 年間には年間24編以上の掲載を実現しています。特に2020年には30編を超え、本年は 4 月末の時点ですでに19編の投稿を頂いております。そして最近の傾向としてはインド、ベトナム、スーダン、ヨルダン、イラン、パキスタンなど中東やアジアからの投稿も多く、新しい ACRT の価値観が確立されつつあるのだと肌で感じております。ハゲタカジャーナルが乱立する中、本誌が研究会で運営し投稿を無料で行うことにこだわってきた結果と考えます。この度の PMC 掲載へ向けての試みに関しては、松原久裕理事長にご相談し、実現に向けて手続きを開始することになりました。またそのための資金に関しては、理事会や公認会計士の先生方のご意見を伺ったうえで研究会で寄付を集めることとなりました。最終的に総額179万円を集めることができました。ご寄付を頂きました会員の先生方には心より感謝申し上げます。

Commentary

これまでのACRTのオンライン化はJ-Stageで行われており、掲載形式はPDFで現在行っていますがPMCでの掲載はXML方式で行わなければなりません。このため審査の段階でもPDFからXMLでの変換資料を作成しなければならずこのための費用が必要となります。また公正な投稿・査読を期すためには使用料を伴うオンライン投稿システムの導入が薦められます。また研究会としてのACRT刊行のポリシー、COI、新しい論文形態の追加、剽窃への対応などを含めGuidelines for Authorsの広範な刷新、Guidelines for Reviewerの創設など多くの変更があります。資金を含め検討事項も多いですので、これらの諸事項を整理し本年の6月に行われます理事会を経てさらに進める予定です。

新型コロナウイルス感染症の蔓延から1年以上が経過しますが、いまだ終息の兆しが見えません。社会的な影響も大きく、多くの研究会がその在り方を問われ廃止する研究会もあるとのことです。日本癌病態治療研究会もこのような状況にあり会員自らが研究会の存在意義を改めて考える時期と思います。ACRTを有し、運営していくことが他の研究会にない本研究会の強みであり存在意義ではないでしょうか。とすれば、何としてもACRTを存続し、さらに優れたジャーナルに発展するべく努力するのは研究会の主たる責務であり、私たち会員にその覚悟が必要です。PMC掲載とACRTの質の向上に向けた試みは途に就いたばかりです。これまでのACRTへの会員皆様からの御支援に心より感謝いたします。さらにACRTの新しいStageに向けてさらなるご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。